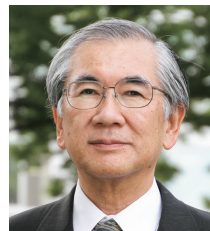




クヌギ (栲木、櫟、ツルバミ [橡])



学校法人中部大学 監事 太田明徳



ブナ科コナラ属 *Quercus acutissima*、属名は「良質の材木」、種小名は「最も鋭い」を意味するらしい。落葉広葉樹、樹高15-20m。東アジアの山地に分布し、日本では本州と九州の各地にみられる。コナラ、アカシデなどと共に雑木林の代表的な樹である。葉は互生し、柄があり長楕円形、葉脈の先端は短く針状に突き出す。雌雄同株異花で、4~5月に雄花が花穂となって垂れ下がる。直径2cmほどの丸い実(どんぐり)は翌秋に熟し、渋みが強く食用

には適さないが、縄文時代には利用されたと言う。実を包む椀のような殻斗は、特徴的な固い総苞片そうほうぺんに覆われている。ブナと異なりクヌギの幹はコルク質に厚く覆われ、表面が縦に割れている。

薪炭材として、また、椎茸栽培ほだきの栲木として利用される。武蔵野は武蔵国の水の便の悪い地域で、江戸期から明治にかけては、開削された用水路に沿って農家が並び、その奥に畑地、さらにその奥にクヌギなどの雑木林があった。雑木林は江戸への薪炭の供給など、多角的に利用された。国木田独歩の歩いた武蔵野は人手が入った明るい林だったろう。雑木林の風趣を好む人は今も多い。

中部大学では工法庵庭内のほか、キャンパス各所の樹林や周辺の森にもクヌギを多数見かける。それらの樹木は大学創建後に植えたものとのことであった(故大西学園長)。室内に放置したクヌギのど

んぐりの殻が割れ、幼根が見えたので鉢に埋めたら、思いがけなく幼樹が育ち、明るい緑色の大きな若葉をいくつも付けている。

クヌギはまた、天蚕の飼養に利用される。天蚕はヤママユガの幼虫で、緑がかった繭から採れる生糸は艶があって高価な織物となる。江戸時代から安曇野の有明地区が山繭やまゆの産地として知られている。小学校同級生の家で立派な機織り機を見かけ、初めて天蚕糸のことを聞いた。父君は農林省の職員で、蚕糸試験場松本支場に勤務していたらしい。

参考)

- ・「図説花と樹の大事典」、木村陽二郎監修、柏書房、1996
- ・「日本の野生植物、木本Ⅰ」、佐竹義輔他編、平凡社、1989
- ・Wikipedia「クヌギ」、山下名譽学事顧問談話
- ・「葉かげなる天蚕は深く眠りゐて櫟のこずゑ風渡りゆく」(美智子上皇后)